

講演会(企画委員会)報告

企画委員会委員長 津田忠雄

企画委員会主催の講演会は、以下の要領で実施させていただきました。参加者は、21名と少なかつたですが、少ないがゆえに活発な意見が交わされました。

題目: 女性アスリートの「性」と「生」を語る ―性同一性障害とジェンダー観のゆらぎ―

日時: 平成22年10月30日(土)午後3時~4時30分

場所: 近畿大学会館

講師: 阿江美恵子氏(東京女子体育大学 教授)

事前の準備不足もありましたが、無事、阿江美恵子先生を迎え、講演会を終えることができました。佐伯先生には、1時間も前に来ていただき、打ち合わせ、会場の設定など準備を周到に整えることができました。

参加者は20名余りでしたが、飯田貴子先生のジェンダー論からの明快で切れのあるご質問とご意見、丹羽劭昭先生の純朴な性への質問と疑問、伊藤章先生の女性アスリート抱えもった生物学的問題などを軸にさまざまな角度からご意見が交わされました。

講演後、阿江先生は時間を忘れ、30分以上も大阪の先生方と意見の交換ができたことをたいへん喜ばれていらっしゃいました。阿江先生が別れ際に、「性的同一性障害をもつ女性たちと面接をしているとどうしようもない哀しみを感ずます。それは彼女たちがもつ得も言われぬ哀しみであり、その悲しみが苦しみとして滲むように私の心に染み広がる感覚です。そこにはいつも『私には何もできない、してあげられない』というむなしさが哀しさと交差しつつ、混沌とした状況があります。」と言葉少なく語られたことが妙に印象的でした。言葉にできない哀しみ、苦しみを受け取ること、たんへんなことだと思ひます。安易に言葉にすると何か大切なものがこぼれ落ちそうな気がします。

「性的同一性障害」というテーマは、講演会の質疑の中でも多く先生方が異口同音に意見をおっしゃっていたように、難しく、軽々しく取り扱うことのできない「微妙な問題」だと思ひれます。それ故に、慎重にかつ早急に対処しなければならない問題であり、課題でもあるように思ひます。

ご協力、誠にありがとうございました。